帰国報告書

乙部町立乙部中学校
教諭　能　代　淳　司

～雑感～「受け入れ、そして、受け入れられる」ということ

１、はじめに

今思えば、赴任前、生徒指導に長く関わっていた影響か、はたまた私の性格上の問題か「受け入れる」ということに関して無縁の生活が続いていたような気がする。むしろ「異なる者をはじく」そんな生活が中心だった。

そんな中、ロンドン日本人学校への赴任が決まった。赴任前の不安な時期は現在管理職としてご活躍されているＳ先生や札幌のＩ先生に非常にお世話になった。そのような先輩のお陰で私自身も不安なく赴任できたことも同時に思い出した。

今回の執筆にあたり、「後に続くであろう方々のためにペンをとる」という勝手な義務感を背負いながら書かせていただいた。乱筆乱文お許し願いたい。

２、経験談

① 英語が得意でない自分を受け入れる

赴任後すぐに始まったストレスはやはり言語環境であった。思うように通じない自身の英語。赴任間もない数ヶ月は英国人との会話がずいぶん億劫であった。いや、意図的に現地の方々とのコミュニケーションの機会を避けていたのかもしれない。そのような中、転機となったのがある日本人からのことば「『英語が母国語の英国人がなぜ、自分のかたことの英語を理解してくれないんだ？』というくらいのスタンスで話せ！」であった。そのように考えるようになった直後から、不思議と英国人とのコミュニケーションがスムーズになったのである。もちろん、私の英語が上達したわけではない。しかし、時には私のつたない英語で互いに笑い合いながら話せるようにもなった。

相手に受け入れられようとして頑張っていた私の英語は、英語が出来ない自分を受け入れるというかたちにうって替わって台頭し、その後、帰国直後までその考えにお世話になることになる。どこかのCMであった「見方を変えれば味方にかわる」とはこのことか・・。

② レストランでは出てきたものをおいしく食べる

私がいくら英語が得意でなくとも私には扶養家族がいた。妻は別としても、育ち盛りの子どもたち３人は食事が楽しみであることは異国の地での生活がスタートした私たち家族にとっても変わらない事実であった。「英国の食事は不味い」そんなことばは渡英前からずいぶん耳にしていたがいやいやそんなことはない。美味しい店は多く存在する。日本と何が違うのかと言えば不味い店も多いということだ。だから、「英国の食事は不味い」ではなく、「英国は美味しい店と不味い店が同じ数だけ存在するオリエンタルで公平な国」ということになる。

話が少しそれたが、渡英間もない頃はメニューのオーダーもままならず、四苦八苦していた。まず、そもそもオーダーができない。やっとオーダーができたとしても、出てきたものがオーダーしたものと明らかに違う。そんな時は店員にクレームしなければならない。英語で。いつからか、レストランで食事をする機会はめっきり減ってしまった。

オーダーはうまくいかない

が、しかし、あるときから私の提案で外食がずいぶん楽しみになったのである。その考えはこうだ。実に簡単で、実に素直な考え方だ。「オーダー後に出てきたものをおいしく食べる」「これを初めからオーダーしたんだと思い込み食べる」そう、出てきたメニューも受け入れるということが大切なのである。

③ £３をくれた親子

ある日、ロンドンから遠く離れたブリストルという街で夕食をとることになった。私たち親子はいつもの精神「出てきたものをおいしくいただく」という精神で親子水入らずの時を過ごしていた。レストラン内でのお客さんの数は多くはなく、私たち家族５人の他に先客が１組いただけであった。その１組の先客は親子と思われる７０代後半の女性と５０代前半と思われる女性２人であった。今思えば、この親子２人は静かに語り合っていたレストランにうるさそうな３人の子どもを連れた親子が現れても、嫌な顔１つせず私たちの入店の際には笑顔で応えてくれていた。

先に入店していたこのその親子は私たちより先に会計を済ませた。するとその親子たちはスルスルと私たちのテーブルに近づいてきて、こう言ってきた。「あなたたち日本人でしょ？」「英国に住んでるの？」「仕事は何？」などと矢継ぎ早に。聞き取りやすいスピードで話してくれたので、何とか答えていると「ところで、お父さん、お母さん」私たち夫婦のことである。「はい」私たち夫婦は返事をした。続けて、その娘さんと思われる女性はこう続けた。「実は私たちはさっきからあなたたち家族５人の食事の様子を２人でずっと見ていました」私たち夫婦は顔を見合わせ『なに！？』的な会話を目でするのが精一杯。一体、この人たちはなにを言いたいのであろう。理解に苦しんでいると「やっぱり日本人は素晴らしいわ。だって、子どもたち３人のお行儀が素晴ら

しい。食事を終えてもちゃんと座っている。どうしたらそう教育できるの」と続けてくるではありませんか。私たち夫婦は笑顔で「ありがとう」なんて引きつりながら答えていると「ところでお父さん、お母さん、この子たち３人に私たちから￡１ずつあげたいんだけどいいかしら。いい子にしていたご褒美よ」と私たちに、向けて軽くウインク。私たちが返事をする間もなく驚いていると財布を開き始め￡１ずつを我が子の３人に配り始めたではないか。何とか会話を理解していた８歳の長男は笑顔で「ありがとう」なにが起こったか理解できていない５歳と３歳の下２人は目の前の￡１に笑顔。そうして、この親子は「私たちの街を楽しんで！」そう続けてこのレストランを去って行った。

ことの全ての事を子どもたちに説明。この日、私たち家族は夕食を終えてから、寝るまで終始、笑顔であった。もちろん、お金が問題なのでない。そのような行為を全く面識のない東洋人に普通に出来るこの国の人たちの懐の深さにである。また、この国に受け入れられた。そう強く感じるそんな出来事であった。

④ 道を聞かれる

これは赴任後、１年以上してからのことだ。徒歩で帰宅途中、英国人と思われるドライバーに「〇〇はどこだい？」なんて感じで軽くたずねられた。そこは私が現在住んでいる人通りもまばらではないロンドンという大都市。私以外にも多くの通行人が存在するのに、なぜ私のなのか。理解に苦しんだ。「からかわれているのか」そうも考えることがあった。しかし、こう考えるようにした。「私もロンドンという街の中に受け入れられている」

その後、何度か道をたずねられたことがあったが、「ごめんね。わからないよ。」という英語が多く登場することになるのだが、帰国間もない頃には土地勘も深まり、ナビゲートできることが増えてきた。

ロンドンという大都市が私という一個人を受け入れてくれたと実感させられた。しかし、それは残念ながら帰国間もないころであった。

⑤ 日本代表戦

幸か不幸か赴任中にサッカーW 杯があった。自国と赴任地の２カ国が出場するということはなかなか難しい。しかし、今回はそれが叶った。しかも、W 杯直前には２カ国で親善試合を行うことに。W 杯開催前の日本チームの評判は高くはなく、日本はフットボール後進国のままだったと記憶している。しかし、その英国人の印象は徐々に変わっていくことになる。

結果は皆さんご存じの通りだが、デンマーク戦後の新聞記事は今でも忘れられない。デンマーク代表期待の長身 FW ベントナーがあまり活躍できず、逆に活躍した日本代表の本田選手。その関係を日本対デンマーク戦後の英国地元新聞はこう表現した。「ベントレーから本田に乗り換えろ」車好きの方ならご理解いただけると思う。なんてユーモアのある、ブラックな見出しだろう。

日本はベスト８をかけた試合で敗れてしまうのだが、ベスト１６入りした日から、日本人は英国内でさらに認められることになる。「お前は日本人か？なかなかやるじゃないか！」よくわからないが、サッカーが強ければ認めてもらえる。そんな国なのかもしれない。そんな貴重な経験をサッカーが産声をあげた国で経験することができた。日本（人）が英国でさらに受け入れられたと感じることができた瞬間だった。

近所のパブにて。本田の得点シーン直後、同僚との一コマ

⑥ 柔道

保健の授業で

柔道の授業を通し、遠く日本から離れている生徒たちに日本文化の学習を深めさせることはできないか。そう考えながら過ごした英国での３年間でもあった。実技を通して柔道を理解し、日本文化を深めることは決して難しいことではない。不便と感じることもある異国での生活をプラスにとらえ、競技特性を学ぶ保健分野とからめて理解を深めることはできないかと。

欧州と日本の生活文化の比較文化論（握手の仕方や建築様式、料理など）の見地からの深まりを目指し、柔道というスポーツ自体もまずは相手を受け入れることから始まるということを互いに共有し、「精力善用」「自他共栄」の発現過程まで結びつけた。

残念だったのは、この授業が軌道に乗り始めたのが、本帰国が決まっていた３年目であったことであったことだ。

⑦ 学級通信

私が赴任したロンドン日本人学校は「長所伸長型」の教育理念のもと、教育活動が行われていた。そのため、学級通信も今まで私が書いていた叱咤激励系の学級通信とは１８０度異なる内容で、最初はずいぶん戸惑った。しかし、そんな学校の教育理念や生徒のことも「受け入れる」という柔軟さが自身に必要なことを教えられたような思い出あった。

【以下はロンドン日本人学校での学級通信記事】

続・文化祭の軌跡

～　最　終　章　～

「何かをつかんだかな」文化祭終了直後の生徒達の表情からある程度の予測はできました。しかし、それが確実に、そして私の予測より「もっと大きな何か」だったと生徒達に気づかされるまで、そう時間はかかりませんでした。

予測が確信に変わったのは休み明け２８日（火）に行った文化祭の振り返りシート作成の時でした。いつも以上に生徒達のペンがスラスラ進み、その上、着眼点も素晴らしく、文章自体が素直に表現されているのです。多くの生徒達は「普段、優しい先輩方の真剣な表情や時には厳しさを感じることもあった」、「自分が中学部の一員であることを感じ、一体感を味わえた」等と書いていました。

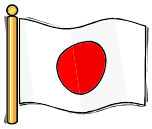
文化祭振り返りシートは教室の背面に掲示しています。一見の価値ありです。日曜参観日の折等にご覧ください。

「肝心なことは、目に見えない。」

１９４２年の１０月に発行された「星の王子さま」の中に出てくる一節です。有名な一節なので、ご存じの方も多いと思います。６８年前の１９４２年と今とでは時代がずいぶん変わりましたが、この一節からは「昔と今とで何も変わっていない大切なことってあるんだな」ということをしみじみ考えさせられます。

文化祭を終えた今、１Ａがさらに大きく成長するために文化祭を終えた今、１Ａ全員の心の中にある共有物をこれからも大切に大切に育んでいきたいと考えています。

『日本代表』としての自覚



日曜参観とバザーがあった翌日、バスに３０分あまりゆられてクレアモ ント校を訪問しました。この日の生徒達は前日のバザーの余韻があったからなのか、明日から休みに入るからなのか、珍しく朝から地に足がついていないような様子でした。そんな生徒達の気持ちも分からない訳ではありませんでしたが、このままの雰囲気で訪問するわけにもいきません。ですから、生徒達にはクレアモント校に到着する前に２度ほど気持ちの切り替えを促す場面がありました。そんなこともあったので、少し重たい空気の中、到着したわけですが、校舎の目立つ所に張られていた手作りのウエルカムボードが私たちの心を癒してくれました。その後、生徒達は個人の内面の良さを随所に発揮し、お世話をしてくれたクレアモント校の生徒達と交流を深めていました。ロンドンでの日常生活もそうだと思いますが、特にこの現地校交流では「日本代表」という自覚が非常に重要だと考えます。少しオーバーな言い方かもしれませんが、この現地校交流での言動は将来の日本の国益にも関係するかもしれません。兎にも角にも校歌の一節にもある「世界を結ぶ架け橋に」を見事に実践できたクレアモント校への訪問でした。今回の経験を今後に続く１２月のクレアモント校来校と１月のアクトン校訪問に生かしていきたいと思います。

【学級通信記事終了】

３、終わりに

最後まで読んでいただいた方々の中に私が赴任した３年間を「なんだ、自分を捨てて流されているだけじゃないか・・・」そう思われる方もいらっしゃるかもしれない。確かにそのような考え方もあろう。もし、赴任前にこのような内容の文章に出会っていたのなら、私もそのように強く感じながら読んだかもしれない。

しかし、私の任期の３年間は「日本をあるいは自分を理解してもらうためにはまず、相手（国）を理解する」こんなことを教えられた３年間であった。「受け入れることの大切さと、難しさ」を身をもって経験できた。

今後、私は赴任する前の４年前とはまたひと味違った「受け入れる生徒指導」もできる教師。そんな教師を目指したい。そう考えている。